

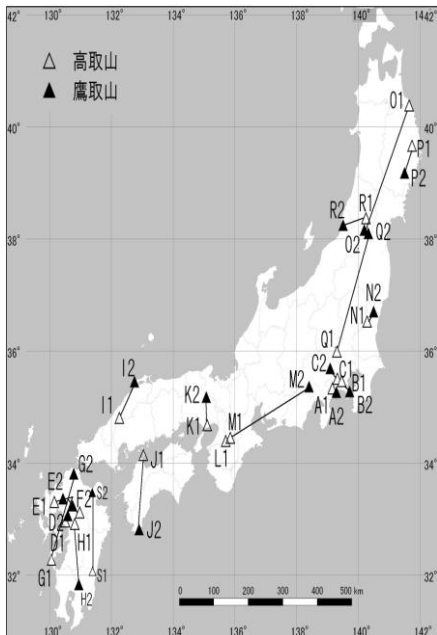
## 愛と犠牲 そして友情の物語

白崎勝

### ヤマトタケル東征の概要

全国にある「高取山と鷹取山」が、神武東征と日本武尊東征の足跡であることを偶然に見つけた。

高取山から鷹取山方向に、東征が進んだことを示している。奈良から東が日本武尊東征の足跡である。これを高尾山や○尾山、高倉山や○倉山が補佐していた。見えてきた日本武尊東征の経路を地図2にまとめた。



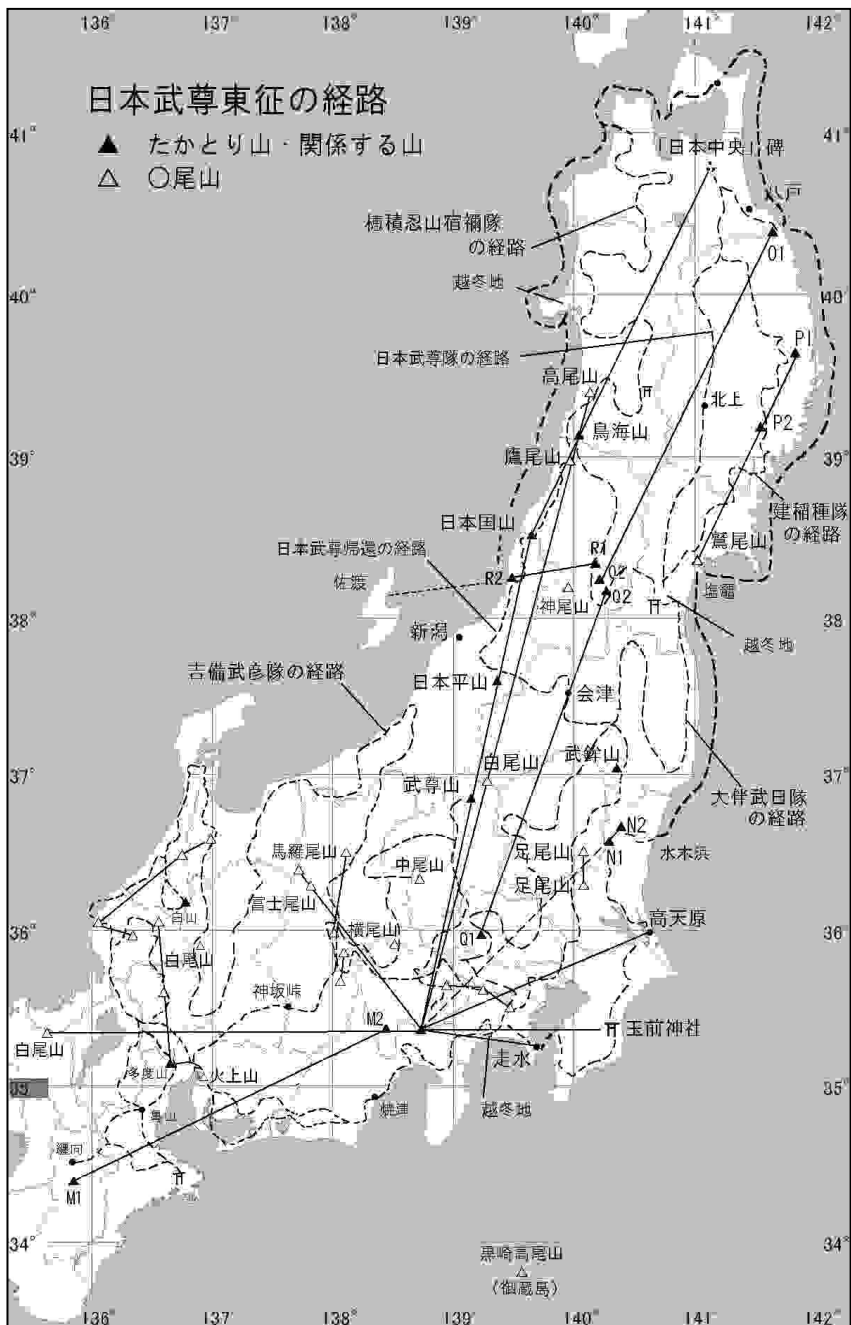
地図1 たかとり山のベクトル

概要は次の通り。

- ① 東征は多くの「タケル」と呼ばれた人の集大成でなく、ヤマトタケル自身が副將軍と力を合わせ、東国を隈なく巡った、足かけ四年に及ぶ遠征であった。
- ② 纏向を出発し、尾張では建稲種が船とともに、副將軍として参加した。東海道を進み、最初の冬を大磯の鷹取山の麓で越す。
- ③ 日本書紀に信濃で分かれて越国に向かったと記す、吉備武彦は、もっと早く相模で尊と分かれ、信濃・佐渡・飛騨と進み美濃で越冬したことが分った。翌年、能登など北陸を隈なく巡り、大野から美濃に山越えし、越冬した後に関ヶ原で尊と再会する。
- ④ 広い関東平野は伴武日が担当した。やはり相模の海老名で尊と別れ、福島まで北上し、いわきから浜街道を北上し柴田町で、尊と再会し越冬した。
- ⑤ 日本武尊は三浦半島から房総に渡り、常陸に進む。その後、船で竹水門（七ヶ浜）に到り、さらに蝦夷が参加して船で八戸まで北上し北から南下する作戦をとった。南下の途中、建稲種は二戸で分岐して、北上山中を南下した。柴田町で尊、伴武日、建稲種は合流し越冬した。

⑦ もう一人の副将軍で弟橘媛の父 穂積忍山宿禰は八戸で

分岐し、下北半島から津軽半島に渡り、津軽平野・秋田



地図2 日本武尊東征の経路のまとめ 改訂2

- に進んだ。男鹿半島で越冬し翌年、横手盆地を巡った後、庄内平野の酒田で尊と再会した。
- ⑧ 柴田町で越冬した尊は、笹谷峠を越えて山形に進み、米沢盆地を巡る。
- ⑨ 置賜の開墾のため、大伴武日を残す。大伴武日は、その後、松戸で帰還の尊と再会した。
- ⑩ 大伴武日と別れた尊は、最上川を船で下り酒田で忍山宿禰と再会する。
- ⑪ 尊は鶴岡・村上と南下して、阿賀野川を遡上し会津に到る。会津から中通りを越え、棚倉町から久慈川添いに南下し筑波山・松戸・都内を経て富士に向かった。富士を巡った尊は、御坂峠を越え甲斐へ、雁坂峠を越え秩父に進む。さらに沼田を経て武尊山に登った。
- ⑫ 沼田から鳥居峠を越えて碓氷峠に立つ。佐久から信州峠を越え北斗市に降りて、富士をもう一度見た。その後、伊那を経て神坂峠を越えて美濃に向かう。
- ⑬ 内津峠を越えたとき、早馬で建稲種の悲報が届いた。大高の宮夜受比売のもとで冬をすごし、翌春、伊吹に向かった。ここで賊の毒矢を受け負傷した。
- ⑭ 近江の遠征を大伴武日に任せ、亀山に向かう手前の能褒野で病のため倒れた。

この行程を表した地図2をよく見ると、富士山への集中が分かる。日本武尊は富士山に大変こだわったことが見てとれる。

### 倭建から日本武への瞬間

ヤマトタケルは双子の兄弟の弟で、兄は大碓命・弟は小碓命と呼ばれた。弟の小碓命は十六歳で九州に西征した。熊曾建との決闘の最中に倭男具那(紀では童男)と名乗っていたが、熊曾建から倭建の名をもらう。

ヤマトタケル東征について、古事記は倭建命、日本書紀は日本武尊と記している。私見であるが東征の中での出来事により名を「倭建」を「日本武」に改めたと考えている。

その出来事とは、纏向を出発して駿河で間近に神々しい富士山を見て、富士山こそ「ひのもとの大倭」の中心と強く思ったと考えた。

その場所は一度目が、焼津から日本坂を越えた峠だったと思う。焼津で火に囲まれて窮地を脱し、敵を追う最中であつたが、この峠で富士山を見て初めて「ひのもと」に「日本」の文字を当て日本坂と名付けたのであろう。「日本」の誕生である。



写真1 日本平の風景

二度目は富士山が素晴らしくよく見える山に登った時で、遠く伊豆の山々に連なる富士山、眼下には海に延びる松原が見える。そしてその山を日本平と名付けて、日本の平けきと、安寧を祈った。

### 足跡経路に見る富士山へのこだわり

日本武尊東征の経路に、富士山へのこだわりを読み取ってみる。

① 奈良の高取山から富士山の西にある鷹鳥山のベクトルは東海道を進んだ矢印である。この鷹取山(1036m)は身延の久遠寺の近くにあり、日蓮が毎日登った身延山(1133m)より低い山である。富士山の真西にあるので、この山を選んだのであろう。

② ヤマトタケルが走水から東京湾を渡ったのは、四月八日と考えた。ちようどの日に、太陽が富士に沈む日だったからである。この日の渡海にかける尊の思いを知っていた妃の弟橘媛は、突然の嵐を鎮め



地図3 高天原

るため身を沈めていた。

③ 鹿島神宮の海寄りに高天原の地名が残る。やや高くなつたここからは、海から昇る太陽と、富士に沈む太陽の両方を見ることができると言われる。それは二月四日の立春である。季節が陰から陽に転ずるこの日のこの場所に高天原と名付けたのは、東征の際と考えた。

④ 茨城県に残した短いベクトルは、那珂川の川渡りした場所を指し挟んだと考えたが、その山の設定に富士山を意識していることがわかる。

⑤ 秋田県の雄和町の高尾山から鳥海山、酒田の鷹尾山、尾瀬の白尾山、富士山に到る直線は500km近い直線である。東征は各地に鳥の尾の意味の〇尾山を残してきた。

鳥海山とは、名付けたきた鳥の尾の山が、日本列島に満ちて鳥の海になったという形容である。

尾瀬の白尾山からは、山峡の間を通して富士山が見える奇跡の場所であった。



地図4 鳥海山

## ひのもとまなか 日本中央の碑を訪ねて

千人の人々で曳いたと伝わる碑が、東北町の石文村で昭和12年に見つかった。「日本中央」と刻んである。矢尻で碑に坂上田村麻呂が刻んだとする説がある。私は日本武尊が東征の途次、陸奥湾が見える石坂という峠に建てたと考えている。



写真2 碑発見の谷

違う。

次に千曳神社を訪ねた。小さな「尾山頭」という山の林の中だった。日本武尊はここまで多くの○尾山を残してきた。そして北の果て折り返しの地点に「尾山の頭」と名付けていたのである。

千曳神社は由緒によると829年、坂上田村麻呂により創祀とあった。千曳神社はその名前から、碑を大勢で曳いて石文村に埋めたときの創祀の名前である。田村麻呂が自分で石文を建てそれを埋めることは考えられない。しかも、田村麻呂はこの地には来ていないとのことである。

打ち首直前に坂上田村麻呂に命を助けられた文屋綿麻呂が征夷將軍として、ここにやってきている。この時、石文を発見し、千人曳きがあったと考える。石坂村、千曳村、石文村が並んでいる。もし坂上田村麻呂が「日本中央」と刻んだならば、命の恩

人でまだ生存している人の石文を取り除き埋めるなど考えられない。

日本武尊は富

明治天皇が近くの千曳神社の回りを掘らせたが見つからなかった碑である。石坂を訪ねて驚いたのは明治天皇がこの近くの丘の上にも立たれていたのである。維新が成って間

もない明治九年、東北巡幸の折

岩倉具視・木戸考充・大久保利

光・大隈重信など総勢百四十八

名を引き連れてこの丘に立った

のだ。碑が石坂にあったと考え

た天皇は、これからの国づくり

に、「日本中央」の碑を残した人

の心を知ってもらいたかったに



写真3 千曳神社

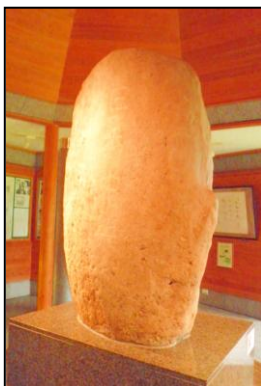


写真4 日本中央の

土山を見たときから「日本中央」を強く意識していた。「日本最北」と刻まなかったことや、これを発見し土に埋めて残した、日本武尊と文屋綿麻呂の見識を称賛したい。

## 日本国名認識と富士山

日本の国の名前についてはいろいろな呼び方がある。

国号のいろいろ

葦原中津国、葦原の水穂国、秋津島、敷島、大八洲国、やまと、倭、邪馬台国、日本国など

七二〇年「日本書紀」成立の時には、日本国の号は成立していたことになる。

六〇七年、聖徳太子の「日出処の天子、書を日没処の天子に致す」の書の内容が有名で、日本国の由来について大陸から見て、日の出の方向にある故とする考えがある。

これでは、まるで大陸の人が倭国を日本と呼んだから、これを拝借してみたみたいで、現にそのような主張がある。

日本人の尊厳にかかわるこの問題について、由来が富士山にあることを述べておく。日本武尊が東征の中で、富士山こそ国の中心で「ひのもと」「日本」と考えたことに始まる。



写真5 日本国

この認識を東征の中で幾度も残していた。

- ① 最初の「日本」発想地点に日本坂、日本平の地名を残し、自分の名前まで変更している。
- ② 東征の折り返し地点に「日本中央」の石文を残した。

- ③ 「日本中央」の碑から鳥海山を経て、富士山に繋がる直線を残した。

- ④ 東征最後の地点に「日本国」の地名と山の名前を残した。

- ⑤ 日本国の山から富士山まで直線を残した。

- ⑥ 富士山から日本国の

山方向に進み、その中間の武尊山に登り、認識を残した。



写真6 日本国



## 藤山を富士山へ改名したヤマトタケル

富士山の富士は漢字の音読みで、古来は訓読みの藤山だったといわれる。それを裏付けるように日本武尊が初めて見た渥美半島の田原市には藤尾山を残している。越国に向かった吉備武彦も甲斐の大菩薩山近くに藤尾山を残している。

日本武尊が最後に富士山を見たのは塩尻峠付近と考える。この峠を越えた安曇野に始めて富士尾山が登場する。この先の馬羅尾山と対で富士山を指し示している。

馬羅尾山からは塩尻峠を越えて、八ヶ岳と南アルプスの間を通して奇跡的に富士山が見える。藤山から富士山の名前変更を残したのであろう。

富士とは、東征につき従う多くの武士たちを思ったのかもしれない。左右対称の文字を選んだのも富士山の秀麗な形から来たと考える。



地図5 藤から富士へ

## 富士山への名残り

古事記や日本書紀に富士山が登場しないのが不思議であ

るが、日本武尊ほどに富士山を愛した人を未だ勝手知らない。東征が終われば、もう二度と富士山を見ることはできないかもしれない。多くの名残を刻んでいた。

- ① 富士山が二度ならず三度見える東征の経路を選んでいる。
- ② 東北からの帰り、二度目の富士では、副將軍の建稲種と山中湖周辺の山々から富士山を遠望して、いくつもの尾山を残した。
- ③ 富士山を見た後、日本国の認識を残すため、富士山から日本国の方角に進んだ。
- ④ 夏の夜、甲斐の酒折宮で食事している。酒折宮は甲府盆地の北側に位置して、富士山が見える場所である。富士山との別れの宴だったと思う。
- ⑤ 甲府から秩父に向かった。途中に石の森という岩が重なる丘がある。その中の一つに日本武尊が腰かけた石があり、その方角を確認すると、南の方角、富士山の見える場所の石であった。
- ⑥ 武尊山からの帰途、佐久から諏訪に向かうが、最も遠い信州峠越えの道を選んでいる。もう一度富士山を見たことが分かる。

⑦ 信州峠から北杜市に降りて、日本武尊は実相寺に桜を植

えている。神代桜として大変有名で今も春には花を咲かせている。

その実相寺を訪ねると、富士山が南アルプスの裾の山で見えなくなる境に位置していた。別れの手向けの桜だったのであろう。



写真7 神代桜

⑧ 日本武尊は中央アルプスの神坂峠を越えて、伊那から美濃に向かう。その神坂峠の横に富士見台という山がある。ここからは南アルプスに遮られて、わずかに富士山が見えない。東征隊はここから富士山が見えると考えたのかもしれない。最後の名残の痕跡と考えた。

### 建稲種副将軍と日本武尊の友情の証

神坂峠を越え美濃に入る内津の坂を下るとき、早馬が来て建稲種が駿河の海に落ち、水死した知らせが届いた。これを聞いた日本武尊は「うつつかな。うつつかな」と悲涙したと伝わる。そこに内津神社を創祀して霊を祀った。

水死の原因は「一日船を浮かべておられると、羽美しく声

おもしろい異鳥が海上に飛翔するのを見て、これを捕え日本武尊に献上しよう」と、追い回すうち突風が起り転覆し溺死した」とある。

伊豆七島の御蔵島には黒崎高尾山がある。原始林の山中で鏡が見つかっていて、その場所に稲種ならぬ稲根神社がある。この御蔵島沖で水死したものと推理した。黒崎高尾山の黒は悲しみの黒と考える。

この内津の坂での出来事も山に託されていないかと考えてみた。すると多治見市付近に高根山が多く見つかった。これらが内津神社を指し示している。高根権現山までがある。内津神社の祭神は建稲種であるから、権現とは建稲種のことなのであろう。



地図6 高根山群

静岡県にもいくつもの高根山があり、これを介して黒崎高尾山と結ばれていた。下田の高根山はここから船出したことを残したのであろう。驚くのは牧之原の高根山、清水の高根



山を経て富士山も結ばれていたことである。富士山は尊と稲種が共に巡って最後に別れた思い出の場所であった。

しかしこれでは、まだ友情の証しとは言えない。同じように日本武尊の墓所と富士山も結ばれているのではと考えた。

理由は能ぼ野の白鳥塚を、日本コバ、黒尾山、御在所山を結ぶ直線が指示していたからである。白鳥塚と富士山を結んでみると、中間に日本ヶ塚山が見つかった。この名前は日本

武尊の塚と言っているのであろう。この山が高根山を結ぶ線の交わるところに設定されていた。日本武尊と建稲種を結びつける日本ヶ塚の山だったのがある。副將軍の中では、建稲種は年が若く、30歳で亡くなった日本武尊と気があったのであろう。



地図7 日本ヶ塚山

## 弟橘媛への愛の証

日本武尊は三浦半島の走水から房総半島に、東京湾を船で渡っている。その渡海の最中、嵐が襲い船が転覆しそうになった。その時、妃の弟橘媛は、無事、尊が対岸に上陸できる

よう神に祈り自分の身を投げた。

渡海の日に合わせて、あらかじめ余裕をもって走水に来ていたようで、大伴黒主という人が、ハマグリを献上し喜ばれたという故事が残る。嵐が来そうなことは予測できたであろう。なぜ敢えて出港したのか？

走水を太陽が通る日、すなわち対岸に上陸して太陽が富士に沈む光景が見える日に合わせたと考えた。そのため、嵐が来そうなか、無理して船出したと思う。

一方、弟橘媛はこの日の渡海にかける尊の心を知っていたこと、この敵しい東征に女が同行して、焼津で火に囲まれたように、自分は尊の足でまといと考えていたのかも知れない。自分が尊のために役立つのはこの時しかないと考えたと思う。入水の前に、

「さねさし 相模の小野に 燃ゆる火の 火中に立ちて 問ひし君はも」

と歌っている。船は富津岬の北まで流されて、木更津の富士見あたりに上陸した。媛が謳った歌を聞かされて、尊はいつまでもその浜を立ち去らなかつたと伝わる。木更津の名前は、この「君去らず」に由来する。

その後、尊は東征の旅の中で、弟橘媛を想い各地に「吾妻山」を残した。

図7に示すように東征の岐路、だんだんその思いは強く

なり「吾妻耶」「四阿屋」あずまや

と遠く呼びかけるような名前の山を残している。日本書紀では「碓日の峯にのぼり、東南の方向を望んで、二度歎いて『吾嬬はや』といわれた」と記している。



地図8 吾妻山の分布

この碓日の峯は、中山道の碓氷峠の頂上にある、軽井沢の見晴らし台のようである。

訪ねてみると、見晴らし台の東南の方向に中尾山が見つかる。そのずっと先が走水であることが分かった。走水に向かって「吾嬬はや」と叫んでいたのである。

尊は伊吹山の戦いで、脚に毒矢を受け近江を経て纏向に帰る予定を変更し、三重廻りで戻ることにした。この道を選んだのは、比較的平坦で脚に負担が少なかったことにもよるが、亀山が弟橘媛の生まれ里だったこともある。

「吾が足は三重の勾の如くして甚疲れたり」と述べ、春欄満の中、纏向に戻ることははやかなわぬ。亀山まであと数kmのところで、力尽き病が急にすすみ亡くなられたと記

す。

白鳥塚にある日本武尊を祀る加佐神社を訪ねると、境内に日本武尊の命日は四月八日と掲示されていた。尊は何としても亀山まで、四月八日までとは彷徨していたことが分かる。そしてその日が来て病が進んだと考える。

夫婦が同じ日に亡くなるこ

とは、確率的には $1/365 \times 1/365$  約 $1/13$ 万で珍しいことではないが、偶然でなくその思いで成したところに弟橘媛への愛があったと考える。



地図9 日本コバ

おわり